

本校教員は約半数が本校OBで、残り半数がJAL、ANAの旅客運航会社や三菱重工、川崎重工の航空機メーカーからの出向者・転籍者等で構成されています。OBの先生方は、現在の学生の履修内容と自身の学生時代の内容をそれぞれ熟知しているので、昔と今の勉強内容の比較について正直な感想を聞くことができます。そんな中で多くのOBの先生から聞かされるのが「今は覚えることが多くてかわいそうだ」という意見です。赴任当初、勉強するため航空整備科の学生が使



勉強の量と質―昔と今

中日本航空専門学校長 磯本聡一

用している教科書を一式そろえてもらいました。日本航空技術協会が出版している、業界では「青本」と呼ばれる本です。第一巻の航空力学から始まり、飛行機構造、航空機システム、航空機材料、機システンエンジン、プロペラ、航空機計器、航空電子など、本を積み上げると30〜40センチの厚さになりました。ボリュームもさることながら、内容がとても難しく、文系出身の私には読破すること自体、大変でした。

OBの先生方が言うには、昔は本がもっと薄く、覚える分量もはるかに少用している教科書を一式なく、基本を繰り返し習得できたとのこと。しかし、整備士資格が学生も取得できる国家資格となったことから、毎年試験内容が難しくなり、現在の形になったようです。

航空局の試験監督官や企業からは、最近の学生は知識は豊富だが、応用力がないとか、考える力に欠けるとよく指摘されています。学生からは覚えることが多くて余裕がないという意見もあります。

勉強の量も質も上がっている中、学生にとって社会にとって、あるべき授業内容を学校として模索している毎日です。